

## 女性ジンにおける抵抗としてのユーモア —『女・エロス』と『呪詛』の分析—

趙 男

### はじめに

ユーモアという実践はジェンダー規範に大きく影響される。歴史的に、女性はユーモアを表現する主体として認識されず、表現としたとしても、そのユーモアは抑圧されてきた。ユーモアは、その表出者と受容者の権力関係を反映し、それゆえ、社会構造を維持したり、強化したりしてきた。ユーモラスな表現を通じて、文化的テキストが繰り返し産出され、上演され、それに伴い人種やジェンダーに関する固定観念やステレオタイプが温存されてきた。その一方で、ユーモアの中には、既存の構造を解体し、破壊する転覆性も潜在している<sup>1</sup>。したがって、家父長的制度の中で支配的な地位を占める男性にとって、ユーモアは権力関係を維持するための道具となりうるが、より劣っている位置に立つ女性がユーモアを使うことは抑制される。

ユーモアを扱ってきた主要な分野である言語学や心理学においては、ユーモアとジェンダーの関係に関する研究が蓄積されてきた。代表的なものに、フェミニスト言語学者ロビン・レイコフによる1975年の著作 *Language and Women's Place* (和訳:『言語と性—英語における女の地位』)がある。激しい論争を呼び起こすことになったこの書物の中で、レイコフは「内省」という概念を用いて、「女のことば」と「男のことば」の違いを分析し、言語における性差別について考察している<sup>2</sup>。だが、彼女の議論には「女のことば」を「男のことば」(それはすなわち「人間のことば」でもある)より劣るものとする価値判断が反映されており、そのゆえ、後にフェミニストの理論家たちから激しい批判を受けることになる<sup>3</sup>。

心理学では、ユーモア研究のパイオニアとされるポール・マギーが1979年、*Becoming Female: Perspectives on Development*において、「ユーモアのセンスが発達した女性の多くは男性と行動特性を共有している」と論じた<sup>4</sup>。これらに見られるジェンダーとユーモアの議論は、むしろ性差を再確認し、ジェンダーに基づいたユーモアの二項対立的な側面を導き出すだけであった。

フェミニズム理論の発展とともに、性差を本質的なものとする研究は根本から

疑問視されるようになった。そして、ユーモアにおける男女の違いに注目することから生まれたのがフェミニスト・ユーモアという概念である<sup>5</sup>。フェミニスト・ユーモアでは、女性がどのようにユーモアを用いて、ジェンダー秩序を破壊し、主体性を取り戻すかに焦点が当てられてきた。その過程において、フェミニスト・コメディと女性文学におけるユーモアの表現が注目されたのである<sup>6</sup>。女性がユーモアの表現者として可視化されるとすれば、それはすでに発言力のある女性に限られていた。さらに、女性コメディアンになるためには「女性らしさ」を捨てなければならないという議論は、「男性的な特性を持つ女性」の方が、そうでない女性よりもユーモアのセンスがあるというマギーの結論と結果的に一致している。

こうした先行研究を参照しながら、本稿は、ユーモアという観点から女性たちが作るジン（zine）を考察する試みである。ジン（zine）とは「非商業的」（noncommercial）で「非専門的」（nonprofessional）な特徴をもつ、個人あるいはグループによって発行された小冊子である<sup>7</sup>。日本のジンはミニコミの延長上にある印刷物であり、女性の発言を実現するプラットフォームとなってきた<sup>8</sup>。本稿は女性たちによって創作されたジンを「女性ジン」と呼ぶ。そして、女性ジンにみられる抵抗としてのユーモアに着目し、フェミニスト・ユーモアがいかに戦略的に用いられるかを検討すると同時に、それがユーモアの主導権を取り戻すため女性の実践となっていることを論じる。リブ時代に出版された『女・エロス』と、「ゆとり時代のフェミニズム」を自称する2016年発刊のジン『呪詛』を取り上げ、それらの比較を通して、女性ジンの中で表現された「抵抗としてのユーモア」について考察する。

本稿では、まずはじめに先行研究を概観、そこからユーモアによって構築される権力関係に着目し、「強化」と「挑戦」という2つの視点からユーモアの機能についての考察を行うが、とりわけ挑戦という機能を巧みに利用した女性ジンにおける「抵抗としてのユーモア」を分析する。次に、フェミニスト・ユーモアの実現をたどりながら、ジンにおけるユーモアを、「表現的なユーモア」と位置付け、これについて論じていく。最後に、女性出版の歴史を参照しながら、『女・エロス』と『呪詛』のテキスト分析を通して、ジンの中で表現される抵抗としてのユーモアを読み解きつつ、「抵抗」とは、批判や服従を拒むという意味での「抵抗」だけでなく、感情の吐露から生まれる「共生」の意味もあると主張したい<sup>9</sup>。これまでのフェミニスト・ユーモアに関する議論では扱われてこなかった、ジンに着目することによって、女性が実践する抵抗としてのユーモアの重要性を論証することが本稿の目的である。

## I ユーモアによって構築される権力関係

### 1. ユーモアの機能——「強化」と「挑戦」

ユーモアは自己を表現し、社会関係を構築する重要な実践である。「ユーモア」が引き起こす結果のひとつとして、「笑い」(laughter)は、優越性理論 (superiority theory) をはじめ、哲学や精神分析学といった分野において議論されてきた。一般的には政治哲学者としてよく知られるトマス・ホブズの笑いに関する議論は、後に「優越性理論」と呼ばれるユーモアのメカニズムを解釈する出発点となった<sup>10</sup>。ユーモアの優越性理論では、笑いが、他人に対して感じる優越感の表現とされている。その後、ハーバート・スペンサーの「笑の生理学」(“The physiology of laughter”)、ジークムント・フロイトの『ジョークと無意識との関係』(*Jokes and Their Relation to the Unconscious*)から発展した精神心理学的アプローチの解放理論 (release theory) や、認知知覚的アプローチからの不調和理論 (incongruity theory) は優越性理論を批判し、ユーモアに関する理論で主導な立場を占めてきた<sup>11</sup>。だが、これらの論理は、ユーモアが生まれるメカニズムを探ろうとする試みであり、ユーモアの機能を理解するには十分とはいえない。ユーモアは政治的なものであり、統制も生み出しうるが、ユーモアそのものを特徴づけ、その機能を要約することは容易ではない。ユーモアは非常に複雑な道具であり、「その威力は使い手と使われ方次第」なのだ<sup>12</sup>。

以下、ユーモアの機能について、既存の認識や構造を「強化」する側面と、それに「挑戦」するふたつの側面について考えてみたい。

シンボリック相互作用論に基づき、心理学、社会学、言語学などの分野でも、研究者たちはユーモアが既存のイデオロギーや権力関係を強化する機能を持ちつつも、それに挑戦する点があることを指摘してきた。社会的イデオロギーや個人のアイデンティティは、日常生活の行為や儀式、パフォーマンスを通じて構築されたり、解体されたりする<sup>13</sup>。ユーモアも同じように機能する日常的な実践のひとつとして、既存の認識や地位を維持し、ひいては社会構造の強化につながる同時に、それを解体することが可能である。

シンボリック相互作用論のアプローチを踏まえ、ユーモアの強化機能をその生産するプロセスから捉えることもできる。アプナー・ジップはユーモアの構成要素を、「作者 (ユーモリスト)」、「聞き手」、「主題」として捉えている<sup>14</sup>。ユーモアを実現するためには、「聞き手」が「作者」の表現したユーモラスな内容(「主題」)を理解できることが重要である。つまり、ユーモアを理解するためには、ある程度の共通意識が必要なのだ。したがって、社会的規範によって生み出された人種

やジェンダーに関する固定観念やステレオタイプは、ユーモアを理解させるための「共通認識」になりやすく、安易に使われがちである。このような場合、既存の認識はユーモアによって再生産され、さらに強化されることになる。特に、差別的要素を含むユーモアに関する議論では、既存の意識や知識の強化に加えて、ユーモアを通じて地位が強化される機能も指摘されている<sup>15</sup>。権力や地位の差はユーモアの実践と高い相関関係がある。ジェンダーの権力構造だけでなく、上下関係や家庭関係においても、より高い地位を占める人が差別的なユーモアを使うことによって、劣位に立つ人を侮辱し、蔑視し、自らの優位性を強調する。対照的に、関係の中に劣位に立つ人は自己防衛的で自嘲的な表現を多用する傾向があり、より高い地位を占める人が表現するユーモアはより攻撃的で排除的な傾向がみられる<sup>16</sup>。ユーモアの使用は、その表現者と受け手の関係性にさらなる影響を与える。ユーモアの強化機能によって、地位がより高い人がユーモアの言説を通じて、(その人が定義する) 共同体という集団の認識が強化され、集団の凝集性が高められ、異質な対象や人が排除される。

その一方で、ユーモアの表現が含んでいる間接的な特性と攻撃性は、劣位に立つ人が権威に挑戦し、否定するための道具ともなりうる。ユーモアの攻撃性について、フロイトは「偉大な者、威厳のある者、強大な者を攻撃するのに非常に適する」と論じている<sup>17</sup>。ユーモアの使用は、本来弱い立場にある人々に意見や情報を伝える力を与え、「ただの冗談 (just a joke)」とすることによって、自分より高い地位を占める人に対する異議を唱えることを可能にする<sup>18</sup>。すなわち、それは相手に対する「意図的な攻撃」ではないと解釈ができるのだ。そのため、弱い立場にある人が異議を唱えようとする際、ユーモアは弾圧されるという潜在的な可能性から「逃げ道」を提供することになる。こうしたユーモアの表現は、常に間接的である。だからこそ、権力の差が大きい場合、弱い立場にある、または抑圧された側の人間が、ユーモアを「抵抗」の道具として用いることが効果的である。

## 2. ジェンダー化されたユーモア

ジェンダーとユーモアとの関係についての研究はしばしば、男女の差異に焦点が当てられてきた。ユーモアの出出において、男性は攻撃性の高いユーモア、性差別的なユーモアを多用するのに対して、女性は親和性の高いユーモア、自己を低下させるユーモアを使用する傾向があると対話分析の研究は指摘する<sup>19</sup>。ユーモアを受容に関しても、メアリー・クロフォードとダイアン・グレッスルや、ジャネット・ホームズの研究が示すように、女性は男性が表現する場合、よりも笑い声を出して、そのユーモアに対して肯定的な態度を表す傾向があると提示された<sup>20</sup>。ユーモアの目的に関しては、クロフォード 1992 年の研究があるが、それに

よれば、男性はそれによって自己の地位を強化するが、女性はお互いの関係性を維持し、凝集性を実現することだと論じられてきた<sup>21</sup>。また、凝集性を実現するために、女性が個人的な経験の笑い話を用いるのに対し、男性はグループ内の共通性を利用し、ユーモアを表現するとジェニファー・ヘイは指摘している<sup>22</sup>。女性が女性だけである場面と、男性も混在している場面を観察したドーン・ロビンソンとリン・スミス・ラヴィンの研究によると、女性は異性がいる場面より女性だけの場面において、よりユーモアを表現する傾向があるという<sup>23</sup>。このように、ジェンダー構造がユーモアの実践に影響を与える同時に、ユーモアを通じて、ジェンダー規範も再生産されてきたのである。

歴史的に、ユーモアは男性らしさと結びつけられ、男性としての魅力を引き出す手段と認識されてきた。女性はユーモアの受け手として位置付けられ、ユーモアを生み出す主体としての実践が無視されてきたのである。ジーナ・バツレーカやレケニア・ギャグニアーのような女性文学に関する研究は、ユーモアの主体としての女性の黙殺を明らかにしてきた<sup>24</sup>。

「ユーモア」と「美」に対する二項対立的な認識も、女性のユーモアが抑圧され、無視される理由の重要なものである。特に非言語的なユーモアは、大げさな体の動きや顔のねじれで表情や仕草の滑稽さを表現することによって、美しく優雅な女性のイメージからはかけ離れていき、ジェンダー規範にそぐわないものとなる。ユーモアは常に攻撃的で、挑発的な側面を有しており、丁寧さや受動性が求められる女性の理想像にそぐわないものである<sup>25</sup>。すでに表現の主体の位置から疎外されている女性が、「ユーモアのセンスがある」という称賛を受けるときは、ユーモアを生み出せるということの意味するのではなく、男性の表現するユーモアを理解し、「正しく」反応できるということの意味するのである<sup>26</sup>。ジップが『ユーモアの心理学』で論じたように、「聞き手」(=受け手)もユーモアの成立に関わる要素なのである。受け手は、笑うか笑わないかによって、表現者への支持や拒否を表すことができる<sup>27</sup>。しかし、男性のユーモアに期待通りに反応できない女性は、ユーモアのセンスのない女性として認識されることによって、受け手も拒否の力さえも奪われてしまう。

ユーモアの実践におけるジェンダー規範の働きのもうひとつの例は、性差別的なユーモアの使用である。ユーモアを言語学の視点から分析したヘルガ・コットホフの性差別的ユーモアの研究によれば、男性は女性よりも敵対的で性的なユーモアを好むが、女性は性的で露骨なジョークの普遍的な被害者であるため、競争的で挑戦的なユーモアを回避する傾向がある<sup>28</sup>。ユーモアの実践には、しばしば特定の「女性らしさ」や「男性らしさ」と結びついているように、ジェンダーが深く関わっているのだ<sup>29</sup>。

上述したように、女性はユーモアを表現する主体とされず、ユーモアを表現する能力そのものが疑問視された上に、その犠牲者となってきた。女性にはユーモアのセンスやそれを表現する能力が欠けている、という古くから繰り返されてきた言説は、知的能力ではなく、身体的能力あるいは特性に強く結びついているといえる。ジェンダー化されたユーモアの秩序を通じて、性差別的な文化や社会的の認識が再生産され維持される。だが、女性のユーモアが抑圧される構造の中で、その実践が無視や軽視されているにもかかわらず、抵抗としてのフェミニスト・ユーモアは発展し、既存の強固な秩序に亀裂を入れようとしてきたのである。

## II フェミニスト・ユーモア

### 1. フェミニスト・ユーモアの意義

「誰にとって、何がユーモアなのか」は根源的な問いである。その点に関して、フェミニズムは、ユーモアをすでに構造化しているジェンダー規範を問題化してきた。フェミニスト運動の発展とともに、女性によるユーモアの受容がどのように変化したかについて、マーティン・ランパートとスーザン・アービン・トリップの研究がある。彼らの1998年と1970年の比較研究からは、女性の反女性的な(anti-female)ユーモアの受容度の低下と、一般的なユーモア(humor in general)の受容度の増加が示唆された<sup>30</sup>。

女性が行うユーモアの実践も、女性コメディアンをめぐる議論をはじめ、可視化されるようになったのである。例えば、キャスリーン・ロウ・カーリンは女性コメディアンと、映画における喜劇的役割を担当する女性の演出を検証し、「逸脱の女性(unruly women)」という概念を提起している<sup>31</sup>。カーリンは、女性がユーモラスな表現を通じて、過去とは異なる、力のある女性像を提供していることを指摘している。カーリンによれば、女性はユーモアの使用を通じて、「逸脱の女性」を演じることができるのである。従って、男性から向けられた視線(gaze)は再利用され、女性はジェンダー規範からの逸脱を宣告し、家父長的な規範や権威を弱めるという<sup>32</sup>。

ユーモアの実践における女性のステレオタイプは、わずかだが打破されたように見えるが、その結果、女性はフェミニストとして「ユーモアのセンスがない」という汚名を着せられることになった。性差別的なユーモア、反女性的なユーモア、ステレオタイプを再生産するユーモアに対するフェミニストたちの拒否は、「ユーモアのセンスがない」ことの証拠として、女性運動の正当性を否定するために繰り返し使われてきた。

だが、アグロリア・カウフマンとメアリー・ブレイクリーの研究は、フェミニスト・ユーモアが有する重要な意義を三点挙げている<sup>33</sup>。

- ① 人々を抑圧するステレオタイプなどの観念を破壊し、公平性のあるユーモアを育む。
- ② フェミニスト・ユーモアは不平を訴えるだけでなく、不平を解決する方法を探る。
- ③ フェミニスト・ユーモアは「正直 (honest)」である。

また、フェミニスト文化の創造におけるユーモアの役割を論じたチンディ・ホワイトによれば、フェミニスト・ユーモアには、フェミニスト・アイデンティティを構築し、共同体意識を生み出す機能があるという<sup>34</sup>。ユーモアを共有することで、共通理解を確立し、現実に対する新たな認識を創造することも可能である<sup>35</sup>。真実の体験から生まれ、既存の構造を破壊し、新たな方向性を提示するフェミニスト・ユーモアは、合理化され自然化された日常生活の言説が引き起こしうる不快感を可視化する実践である。アンナ・フレイによれば、「大胆かつ挑戦的な (defiant)」フェミニスト・ユーモアはこうした日常に対する反省を呼び出す実践である。彼女は、笑いを身体的な自由として捉え、次のように指摘する。

「笑いは身体から生まれ、女性の身体はミソジニー、トランスフォビア、人種差別、暴力、特権、快樂の文脈の中で生きている。笑いに対するフェミニストのアプローチは、ユーモアの修辭的な力を意識している。ジョークは私たちが好奇心へと導き、洞察力と批判的思考を刺激し、私たちのコミュニティと仲間との間に橋をかける助けとなる。」<sup>36</sup>

フレイはこの本の第四章で、性暴力の経験のパフォーマンスの題材にしている女性コメディアンへのインタビューを通じて、屈辱的で無力な被害者というイメージがそのユーモアによっていかに覆されるかを論じた。フレイによれば、フェミニスト・ユーモアは、性的トラウマを克服する可能性を示唆し、コミュニティの構築にも関与している<sup>37</sup>。フレイの議論から分かるように、フェミニスト・ユーモアはただの快樂を生起する実践ではなく、ユーモアの「修辭的な力」を活用し、共同体の中において、お互いの理解や、経験と感情の共有を実現するための実践である。

同様に、エイミ・マーヴィンもフェミニスト哲学の視点からユーモアに関する議論の中で、ユーモアにおける「制度的な抑圧 (systematic oppression)、政治

的関与 (political engagement)、具現化 (embodiment)、情動的な結びつき (affective ties)」の重要性を強調している<sup>38</sup>。

マーヴィンが論じる「情動的な結びつき」とは共感 (empathy) を通じて、人間的なつながりを構築することを意味する。同時に、ユーモアから生み出される「情動的な結びつき」は、異なる目標や価値観によって分断されたコミュニティにおいて、「政治的な限界 (political limits)」があるとマーヴィンが指摘している<sup>39</sup>。だが、この議論をあげたマーヴィンは、ユーモアの政治性を否定しているのではなく、ユーモアに共感できない、拒否することが、異なる共同体に属する、あるいは異なる価値観を表明する行為だと主張しているのである。従って、マーヴィンは、差別的なユーモアを笑おうとしないフェミニストたちの「楽しみに水を差す (killjoy)」という行為の意義を強調している<sup>40</sup>。フェミニストたちのユーモアの実践は、ユーモアを表現することによってのみ達成するのではなく、それを拒絶することによって実現される。

マーヴィンがユーモアの政治的な限界についての議論は、「フェミニストはユーモアのセンスがない」という論調への反論となりうる。また、カウマンとブレイクリー、ホワイトの議論は、フェミニスト・ユーモアの創造性、共感、連帯を生み出す機能を明らかにしている。とりわけ重要なのは、カウマンの議論が、女性のユーモア (female humor) とフェミニスト・ユーモアを区別している。後者は抑圧から抜け出す道を模索し、希望を生み出す実践であることと彼女は強調している<sup>41</sup>。女性のユーモアはフェミニスト・ユーモアへ進化したが、ジンのユーモアとは、創造的なユーモアであり、自分自身の経験を重視する「表現的」なユーモアであることを後に見ていこう。

## 2. パフォーマンス・ユーモアと表現的なユーモア

ユーモアを表現する形式は多様である。例えば、言葉によるユーモア、文字的によるユーモア、演出によるユーモアなどがあるが、いずれにせよ、ユーモアにはその表出者と受け手が存在する<sup>42</sup>。話し言葉やジェスチャーなどを用いて、言葉や演出で表現されたユーモアは、受け手から直接的な反応を受けるが、文字で表現されたユーモアは、表出者と受け手の間に距離を置く。本稿では、言葉や演出で表現され、相手に直面するユーモアを「パフォーマンス・ユーモア」と呼び、文字で表現されたユーモアを「表現的なユーモア」と呼ぶことにする。

パフォーマンス・ユーモアは日常的な対面でのコミュニケーションで発せられるユーモアを含め、受け手がその場でユーモアに即座に反応するので、表出者は常に相手の反応に配慮しなければならない。女性のユーモアはジェンダー化された役割の演出の一部になることもあるが、また、時には男性を模倣するパフォー

マンスとなることもある<sup>43</sup>。

それに対して、表現的なユーモアは受け手の反応をその場で確認することができない。そのため、受け手の反応にとらわれず、自分自身の表現に集中することができる。とりわけユーモアを表現することが、ジェンダー規範からの逸脱だと批判されやすい女性にとって、より強い「抵抗力」を持つ。表現的なユーモアはパフォーマンス・ユーモアより受け手のプレッシャーから逃れやすいからである。表現的なユーモアの有効性は、パフォーマンス・ユーモアの中にありがちな弱者の自虐的あるいは自嘲的表現に対して、攻撃性の高いユーモアを安全に使えることである。また、表現的なユーモアは、他人が何を聞きたいかよりも、自分が何を伝えようとしているかに集中するため、共感し合える人と共有することができる。表現的なユーモアについての考察のひとつとして、女性文学の再評価が考えられるが、今までフェミニスト・ユーモアに関する研究は、表現的なユーモアよりもパフォーマンス・ユーモアに集中してきたといえよう。

ジンに表現されたユーモアをフェミニスト・ユーモアの視点から捉えることは、ジンの分析に役立つだけでなく、抵抗としてのユーモアを理解するための新たな材料にもなる。フェミニスト・ユーモアの議論は女性コメディアンの活躍とともに活発に行われてきたが、コメディアンや日常会話におけるユーモアの実践と異なり、ジンで表現されるユーモアには、受け手に直面することはないため、相手を意識しながらのパフォーマンスよりも個人の感情や経験を表現しやすい。表現的なユーモアが中心となるジンにおいて、ユーモアの言説は女性としての個々の経験を訴えている。ジンのユーモアは、女性としての共同体的な意識を獲得するために機能している。しかも文学のように限定的でない、文学の訓練に備えられていない一般女性のユーモアの実践の場となっているのである。

### Ⅲ ジンの中のユーモア

#### 1. ジンの中のユーモア

英語圏におけるジンのユーモアに関する研究の多くは、大胆で不遜な語句の使用に注目してきた。例えばスティーブン・ダンカムは、「アイロニー (irony)」を、風刺を表現するユーモアの一形態として論じている。ダンカムによれば、「アイロニー」はジンの求める「真正性 (authenticity)」とは反対のものであり、言いたいことをあえて言わない表現手法である。ジンにおいて、アイロニーは、主流文化の中に存在している言説の本来の意味を破壊し再生産することで、消費主義文化への反撃として使われる。同時に、アイロニーは共通の文脈への理解を前提

とするため、主流文化からの介入を避ける。意味を共有することで成立するこの表現手法は、コミュニティのつながりを強める働きもある<sup>44</sup>。だが、ダンカムはアイロニーへの懸念も示している。アイロニーが作り出す壁はますます排他的になり、ジンの内容もより晦渋でわかりにくくなるからである。主流文化を風刺し、攻撃するアイロニーの内容は主流文化に依存している側面もあるため、主流文化から完全に自由であるわけではない<sup>45</sup>。

アリソン・ピープマイヤーはジンのユーモアを「プレイ (play)」というキーワードで捉えている。ピープマイヤーの議論は、ガール・ジンに焦点を当てるものであり、女性と少女がつくるジンを「流動性、矛盾、断片化を捉えるメディア」として認識し、「実験と遊びのための空間」としている<sup>46</sup>。ピープマイヤーによれば、ガール・ジンのジェンダーへの介入は、「矛盾を受け入れ、時には攻撃的にときに遊び心を持ったやり方で女性性の記号論への取り組みを強調する」実践である<sup>47</sup>。そして、ジンで表現されている「女らしさの快楽」に関する内容は「抵抗と共謀の間の空間でプレイ」する戦略となるのだという<sup>48</sup>。

本稿の後半ではダンカムとピープマイヤーの議論を踏まえ、フェミニスト・ユーモアの視点からジンのユーモアの潜在的な力を考察する。ジンにおいて表現されるユーモアは日常を「正直」に語るテキストであり、不平を訴えるためのひとつの方法である。また、ユーモアを理解するためには、共同体的意識が必要となる。ジンの流通は大規模な商業流通ではなく、コミュニティ内での情報交換をベースとしているため、ジンの作り手が想定する読者は「一般大衆」ではなく、「仲間」である。仲間内で理解し合えるユーモアを表現することが、たしかジンの表現の戦略なのである。しかし、ジンのユーモアは、外部からの干渉を遮断するための壁というよりも、共感のために使われるだと主張したい。ジンは何らかの理念を広めるために作られるのではなく、共同体的意識を持つ仲間を見つけるための道具となるのだ。前述のホワイトはフェミニスト・ユーモアを排他的なものではなく、「女性を大切する (value women)」ものとして、女性の可能性と自主性を重視する実践だと指摘した<sup>49</sup>。こうしたフェミニスト・ユーモアに関する議論を参照しながら、次節では女性出版の歴史を振り返り、女性の抵抗としてのユーモアの特徴を見ていきたい。

## 2. 『青鞥』から『女・エロス』、そして『呪詛』へ——女性出版の歴史

日本では、1911年に、女だけの雑誌『青鞥』が出版され、女性自身による出版の歴史的な一歩を踏み出した。『青鞥』が体現した女性による女性のメディア生産の精神と実践は、1970年代のウーマン・リブにあって、ミニコミという形で受け継がれた。その代表的な例が、1973年創刊の『女・エロス』である。『青鞥』

の創刊号の辞となった「元始女性は太陽であった」は『女・エロス』の創刊号で「資料発掘・女の宣言(1)」として転載された。タイトルの下に、「女の遺産として大切なものに触れるため」という語句が書いてある<sup>50</sup>。『女・エロス』の創刊にあたって、明確に『青鞥』の重要性を肯定しつつ、女性の解放は女性自身の手で行わなければならない、という信念を持ち続けている。『女・エロス』第2号においても、「姉妹からの便り」の中に、「青鞥を超えて」を題とする文章が寄稿された<sup>51</sup>。その中には、次の内容があった。

「女・エロス」がどのようにして『青鞥』をのり越えてゆくか、また、あらゆる論争をどんな形でまき込んでゆくか、女のはしくれとして軌跡をさぐりたく、また、批判と論争の足がかりとして期待しています。

——『女・エロス』創刊号 姉妹からの便り「青鞥を超えて」大久保美知子  
(1973年)

「女のはしくれとして」や「軌跡」という言葉から、『女・エロス』は『青鞥』を継承していることが見てとれる。そして、同号の巻頭にある、「私たちは人間である前に女である」という文からは、『女・エロス』が、「女性とは斯くも意気地なきものだらうか、否々、真正の人とは——」とする『青鞥』の跡を追って、「社会的規定性の自縛から、自らを解き放とうとする女」に発言の場を提供し、情報を伝達し、支援しようとしていることがわかるのではないだろうか<sup>52</sup>。

『青鞥』から『女・エロス』への発展はミニコミの形で継続したが、ミニコミの時代から現在までの女性出版の歴史を、『女・エロス』と今日のジン『呪詛』に取り上げられたテーマの共通点から考えられることができる。『呪詛』は2016年に創刊されたジンであるが、その表紙に書かれた「模倣か進境か終焉か行き詰まりと矛盾を生きるゆとり世代フェミニズム」というフレーズが示したように、『呪詛』の中にはしばしば『女・エロス』から継続した議論がみられる。

例えば、1973年の創刊号で『女・エロス』は「婚姻制度を揺るがす」と題した特集を組んだ。女性の婚姻体験談や、婚姻の裁判の判例を解明しながら、婚姻制度を問う試みであった<sup>53</sup>。そこから50年近くが経過した2022年、『呪詛』もまた、「もうパワーストーンでよくね」と題して、婚姻制度に疑問を投げかけるような文章を掲載した。「結婚するとなんでも作れる・得られると言うイメージがちょっと世の中オーバーすぎるんじゃないか。」と作者は述べ、「結婚」をパワーストーンになぞらえ、その不条理について考察をすすめ、婚姻の必要性に疑問を呈した<sup>54</sup>。

もうひとつの重要なテーマが避妊である。『女・エロス』第5号にDES(避妊

用薬：ジエチルスチルベストロール）に関する翻訳文「女性の医学：人間性回復の医学へ」が掲載され、医学分野における女性軽視を訴えた<sup>55</sup>。同じテーマに当たって、『呪詛』第4号に、作者は自分が飲んだピルの写真を読者に共有している。「女の体は宇宙をはぐくむ」を特集とした『女・エロス』第5号と同じように、『呪詛』第4号の表紙には「社会は少しずつよくなっているらしいけど、私の毎日はどうだろう。呪詛と祝福を往復しながら、“女のからだ”で今日を生き延びる。」とある<sup>56</sup>。

『女・エロス』と同様に、『呪詛』にも恥に関する記述がある。『女・エロス』第5号に、「トイレの話：解放を味わう中国の便所」の文章の中、作者の浜烈子は1972年に中国への訪問で中国の仕切りのない便所にショックを受けた経験を記述した。自らの過剰な反応に対して、仲間から「日本が極端に恥の文化を作ってきているだけよ」と言われた作者は「恥文化」と「人間本来の解放感」との矛盾を自省した<sup>57</sup>。『呪詛』では、「大衆浴場」の作者、はるのたけのこは「音姫を使うって、逆にうんちをしていることがバレると思う。そこは気にしない日本人。面白い。」と恥に対して別の視点を打ち出している<sup>58</sup>。このように、『女・エロス』、『呪詛』には女性出版の歴史が垣間見えると同時に、同時代的な表現上の特徴がみられる。

日本において、ジン（zine）という用語は1990年代以降、アメリカ合衆国で始まった「ライオット・ガール」ムーブメントの影響で流行したと思われがちである。だが、日本固有の文脈において女性ジンのルーツを考えるならば、それは『青鞥』の出版や「ミニコミ」時代に遡ることができる<sup>59</sup>。『青鞥』から『女・エロス』、そして『呪詛』へ、100年以上にわたって女性出版は、女性のためのメディアを創るという信念を継続し、実行してきた。こうした歴史から明らかのように女性出版は女性運動に大きな役割を果たしながら、女性運動とともに発展してきたのである。各誌の創刊理由を伝える以下の語句からは、女性による女性のためのメディアをつくるという強い意志が伝わってくる。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。

偕て、こゝに「青鞥」は初声を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によって始めて出来た「青鞥」は初声を上げた。

——『青鞥』創刊号 序文 平塚らいてう（1911年）

男社会の女の規定性の中での生き難さに忍従するのはゴメンだ！女たちよ、今、自分はどうしたいのか、をじっくり考えよう。女の性の規定性の呪縛を解き放つことは容易ではない。‘生きる性’を自分の手で‘生きる性’にかえるために、女たちよ、「女・エロス」を媒体として、歩みだそう。

——『女・エロス』創刊号 編集後記 大谷（1973年）

模倣か進境か終焉か行き詰まりと矛盾を生きるゆとり世代フェミニズム

——『呪詛』創刊号 表紙（2016年）

絡みつく呪縛に足を取られながら書くあなたへの手紙のような ZINE

——『呪詛』第2号表紙（2019年）<sup>60</sup>

20世紀初頭、平塚らいてうを始めとする『青鞥』の編集者である女たちは「新しい女」と自称している。この用語は、彼女たちを揶揄する「新しい女、五色の酒を飲む」や、「新しい女、吉原に遊ぶ」のような新聞の記事から流用されているが、平塚らいてうらはあえてこの蔑称を使うことにした<sup>61</sup>。同様に、60年代後半から70年代にかけて、当初の「女性解放運動」という言葉が「ウーマン・リブ」に変わったのは、当時の女性たちが「リブ」という「世間では評判の悪い」言葉を意図的に使った結果である<sup>62</sup>。今日に至って、「ゆとり時代フェミニズム」と自称する『呪詛』は自嘲気味ではあるが、新しい時代のフェミニズムの行き先を探ろうという意欲も伝わってくる。女性出版の歴史において、こうした風刺の意味合いを持つ自己呼称の使用は、ユーモラスな表現手法によって、女性の造反を宣言している行動である。

ピープマイヤーが論じたように、ジンはしばしば女性を蔑視する言葉をあえて強調して使うことがある。これは侮蔑語の創造的な再利用なのである<sup>63</sup>。こうした創造的な言語の使用を解釈するために、次節は「概念ブレンディング理論」(conceptual blending theory) と前述の不適合理論を用いることによって、『女・エロス』と『呪詛』のテキスト分析を行う<sup>64</sup>。

### 3. 『女・エロス』——抵抗としてのユーモア

「概念ブレンディング理論」とは、本来異なる領域にある語彙を組み合わせることで新たな意味合いを生み出すための実践を理解しようとするものである。

『女・エロス』の目次には、「グラビア」という写真のページが設けられる。「グラビア」とは、もともと印刷手法のひとつとして、グラビア印刷として使われていた。日本では、特に男性向けの週刊誌で、性的な表象とされるグラビアアイドル（略して「グラビア」）という言葉に流用されているが、『女・エロス』では意図的にこの語が使われている<sup>65</sup>。女性を性的対象としてのみ眼差すことに対する反発であり、消費主義社会への風刺でもある。しばしば性的なアピールの意味合いを匂わせる「グラビア」という言葉をあえて使うことで、『女・エロス』がこのページに掲載する写真は、女性のヌードを表現するものもあった。『女・エロス』第1号（1973年）の「グラビア」ページは「逢い.. EYEそして愛」を題として、1971年から1973年にかけてウーマン・リブ運動の最中に撮られた松本路子の写真が掲載されている（図1）。そこには、1971年8月の第一回リブ合宿で撮られた、野草の中で女性10人の裸の姿であった。ひとり離れている写真の右端にいる女性が、9人の女性たちに合流しようとしているとことである。全員が裸だが、性器の部分は白い線で隠されている。キスしている女性もいるなど、プライベートで自由な雰囲気がよく伝わる写真である。しかし、ここでの「女性のヌード」は性的な暗示やポルノではなく、シスタフードを表しているのだ。この雑誌で用いられた「グラビア」なる言葉は、女性を性的対象として認識することへの反撃であり、創造的で反抗的な言葉の盗用なのである。

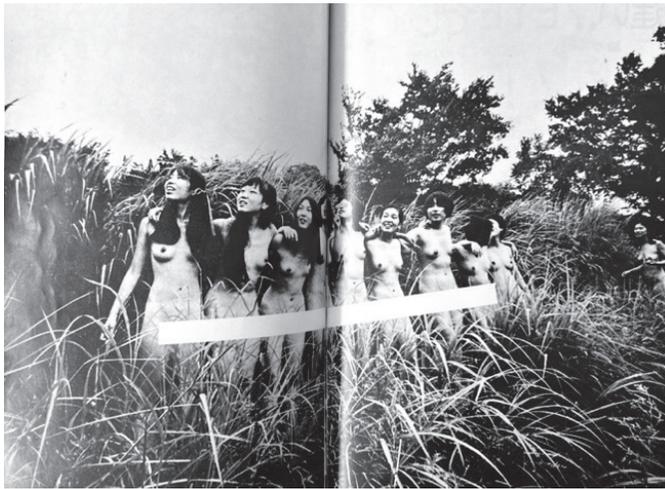


図1 『女・エロス』第1号（1973年）「グラビア」<sup>66</sup>

「逢い.. EYEそして愛」1971年8月第一回リブ合宿（長野県）松本路子

同様に、言葉の創造的な使用は、『女・エロス』第2号では、漫画「お気に召すままに」からもみられる。この漫画では、「産めよ」「ふえよ」と強要された雌

鶏が、不満を抱きながらも、「地に満ちる」ほど、卵を産んでいる様子が描かれている（図2）。雌鶏の「産める」という行為と、雄鶏を「埋める」行為が「うめる」という言葉で掛け合わされているのである。作者の飛鳥は「うめる」という言葉の多義性を利用して、順従に見える行為を反抗の行為へと変転させる。カウマンとブレイクリーが論じたように、フェミニスト・ユーモアは不平を訴えるだけではなく、抵抗を表すことによって、希望を汲む実践である<sup>67</sup>。この「希望」とは、女性の経験した不平を変えるための新たな可能性を探求することである。漫画「お気召すまに」において、「産める」という言葉の意味の変化は、言われたことを受動的に甘受する行為から、能動的に反抗する行為への変化を意味する。この中からみられるのは、まさに女性が現状を打破するための試みであり、抵抗の行為から表現される女性の主体性と能動性である。



図2. 飛鳥狂花「お気召すまに」『女・エロス』第2号（1974年）<sup>68</sup>

不適合によってユーモアが表現されるもうひとつの例として、『女・エロス』第5号の文章「ゆうもあたっぷり 女性抑圧賞」があげられる。作者の松尾公江は、『女性自身』の創刊に参画し、評論家として『文藝春秋』などに連載していた草柳大蔵に表彰状が授与された。

表彰状

草柳大蔵 殿

貴君はともすれば自由と解放をめざす‘婦女子’の首を押さえ、なだめすか

し、あるいは絶妙な甘言をもってその決起を阻止し、男社会の存続に貢献した。よってここに表彰します。

——松尾公江「ゆうもあたっぷり『女性抑圧賞』」『女・エロス』第5号（1976年）

松尾の文章では、「女性抑圧」と「表彰状」の不適合によってユーモアが表現されている。人間を抑圧することが必ずしも称賛に値するものではないことは当然であるが、松尾は「女性抑圧賞」を与えることで風刺をきかせて批判する。

『女・エロス』には、概念ブレンディング理論不や適合理論の観点からみて「抵抗としてのユーモア」の実践がみられるが、同様の表現が『呪詛』にも見られる。また、『呪詛』における「抵抗としてのユーモア」は、批判や服従を拒むという意味での「抵抗」だけでなく、「共生」を生み出すという意味での抵抗の実践である点を強調したい。共生は日常生活では表現しにくいのが、ユーモアを用いることで、経験や感情を吐露することができるようになる。

#### 4. 『呪詛』 —— 共生：経験と感情を吐露するためのユーモア

『呪詛』第3号の「フェミニズム都々逸」は、概念ブレンディングからユーモアを表現する例である。都々逸とは江戸末期に流行であった「七・七・七・五」の音律に従う口語の定型詩であり、主として、男女の情愛を主題とするものとされる<sup>69</sup>。『呪詛』に掲載された「ふえみど」には次のようなことが書かれている。

「女性に人気ナンバーワン！」のメニューはどこもベジタブル  
ベジタブルより肉が食べたい肉が食べたい夜がある！

時代に合わせ物分かりよく感じよくなるフェミニスト  
女性の活躍 男女平等 がんばる日本のおじいさん

——堀川千織「ふえみど（フェミニズム都々逸）」『呪詛』第3号（2021年）

このフェミニズム都々逸において、作者の堀川は「女性の活躍」と「がんばるおじいさん」の不適合から、形骸化した「男女平等」の達成を風刺している。辛辣な言葉遣いはもちろんのこと、昔から男女恋愛を描く都々逸という文体をフェミニスト的な内容に使うこと自体、風刺とみなすことができる。「フェミニズム都々逸」での話は、この古い文体と「フェミニズム」を組み合わせたもので、概念ブレンディングからユーモアを表現する手法だといえる。「概念ブレンディン

「グ理論」から考えるジンの中に表現されるユーモアはこうした文体と内容のブレディングだけでなく、もうひとつあげられるのは、異なる概念間の混同である。

例えば、『呪詛』では、「白条鶏」の処理過程と女性の美容手術の過程をブレディングで考えることで、日本における「三大美容の切り札」とされる「美白」、「脱毛」、「腸内洗浄」を「白条鶏」の処理過程の比喩とする文章がある<sup>70</sup>。

女たちは笑すぎる。しかも、カメラの前で笑顔を維持しながら、目元の皺にも常に気を付けなければいけない。

——趙海涵「『白条鶏』から語る」『呪詛』第3号（2021年）

この文章は、「笑うこと」と「皺が増えること」の間の矛盾を捉え、女性のあるべき姿に対して疑問を呈し、女性が客体化され、オブジェクトとして扱われる現実を批判している<sup>71</sup>。ナンシー・ウォーカーのフェミニスト・ユーモアに関する議論において、ジェンダー規範と女性としての経験の間に存在する矛盾から生まれる「二重のテキスト（double text）」の存在が指摘されている<sup>72</sup>。ジンのユーモアも同様に、このような「二重のテキスト」を利用することで、ユーモラスな表現を通じて女性の面している「現実」を披露する。女として日常的に経験する不適合を表現することで、ジンのユーモアは世間に「正常」とされるものを「異常」へと変化させるのである。ジンにおけるユーモアの表現は、異なる概念を混同し、それらを「破壊」することにより、規範的な「社会認識」に従うことを拒み、既存の自然化された言説に抵抗する。

ジンの内容は、しばしば個人的であるが、真実を語る内容なのである。その内容から、読者は常に自分自身の類似な経験を見出す。ジンの作り手と読者の間に、共有する経験はジンを通じて伝わり、ジンのユーモアはその感情を吐露するための表現手法である。読者は作り手のユーモアを理解することによって、共同体感覚を獲得し、「共生」の意識が生み出される。

ジンの中に表現されるユーモアの「共生」という視点は前述したホワイトの議論から理解できる。ホワイトによれば、フェミニスト・ユーモアは抑圧に対する共同的な抵抗を喚起している。そこから連帯が生み出され、フェミニスト・カルチャーが構築されるのである<sup>73</sup>。ジンのユーモアが伝わる「共生」という視点は、『呪詛』第3号の「ピュアバーガーと私」を題とするエッセイから見てみよう。

作者のじょっちゃんは就活の帰り道の電車内で、同企業の入社試験を受けた三人（二人の男と一人の女）に声かけられ、彼らの嫌味な「ユーモア」に気分を害した経験を語っている<sup>74</sup>。二人の男たち（「よさこい男」と「地味男」）はニヤニヤと

して、自分の小銭入れに入っている「あれ」について会話を始めたので、じょっちは「おとなしく耐える」ことにする。作者は彼らと同行している「ヤンキー風な女」が、「聞き役」にまわったが、「あれ」とは「お金が貯まるおまじないか」のことかと質問しところから、彼らの「ユーモア」が本領を発揮し始める。

よさこい男は「いやいやいや」とニヤニヤした。「この子の前でそんなもの出すなよ。」と地味男。「ピュアな君にはわからないかな～俺は汚れだからさ～」…（中略）…どうやらコンドームが入っていたらしい。地味男がとっさに話を変えようと「へえ、五百円。俺の母親も小さい亀のお守りみたいなもの入れてたよ。お金貯まるって。」と言うと「ふーん、そんなおまじない信じてるなんて君のお母さんもピュアなんだね～～」と被せるようニヤニヤ発言するよさこい男。はやくよさこい騒乱罪で捕まれ。その時、車窓からピュアバーガーなる商品がデカデカと描かれているロッセリアの広告が見えた。それを見て「俺たちはピュアじゃないからピュアバーガー食べられないな！」と私を除く三人で爆笑したあと、地味男が「やめてやれよ、かわいそうだろ。」とさりげなく困っている女の子を守る俺を演出…（中略）…内心ムカついていたが何も言い返せない自分にも腹が立った。

——じょっちゃん「エッセイ：ピュアバーガーと私」『呪詛』第3号（2021年）

作者が記述した体験において、「よさこい男」と「地味男」が演じるユーモアはそれぞれの役割分担がはっきりしている。ユーモアを表現しているのは明らかに男性であり、女性であるじょっちゃんにくわえ、彼らと同行している「ヤンキー風な女」と会話の中に出てくる地味男のお母さんも、ユーモアの受け手、またはユーモアの対象として位置づけられていた<sup>75</sup>。ここで注目しておきたいのは、「よさこい男」のユーモアが、「ピュアな、かわいそうな」女性に対する配慮するジェントルマンを演じる「地味男」との共同演出によって達成されている点である。すなわち、コンドームとは何かを知らないピュアな女の子を「キャラ設定」して、汚れの自分（男性）が無知なあなた（女性）を揶揄し、ユーモアを表現する場面なのだ。作者は自分の経験をもとに、男性のユーモアに遭遇する時の嫌悪感を表現し、「はやくよさこい騒乱罪で捕まれ」と不満を表現している。ユーモアの受け手の位置を与えられている女性が男性の「ユーモア」に直面したとき、特にそれが性的な暗示が含められたものである場合、無言でやりすごす方が無難である。たとえ、反論したとしても、またすぐジョークの対象にされてしまうからである。だが、沈黙によって、不快感はいつまでも消えず、無力感を抱く。

このような無力感からの解放は、ジンによって可能となる。ジンは対話と異なり、直接的に攻撃されることもなく、自由に自己表現のできる比較的 안전한言説空間である。また、文学作品とも異なり、誰でも作者になれるジンのユーモアは、日常的で、個人的な感情の経験を伝達する。そこから共感が生まれ、さらには連帯が育まれる。しかも、ユーモアの表現も加えて、この伝達は大声で叫ぶのではなく、読者の耳元で囁くように伝えられるのだ。普段の会話では言いにくい体験や感情をふと漏らすように、ジンは読者に何かを伝えるのである。

上述の「ピュアバーガーと私」に記述された作者の経験は、女性をターゲットにして発せられるユーモアの卑猥さについて語り、その時の彼女の感情を伝えるものとなっている。作者が言及する「何も言い返せなかった」悔しさは、少なからぬ女性に共通する経験である。それゆえ、ユーモアを通して伝わるのは、感情の吐露ともいえるべきものであり、それは女性の間に共感のようなものを呼び起こすのである。最後に作者は「その後、その企業は最終面接まですみませんが、無事落ちましたとさ。めでたしめでたし。」と軽快な調子で締めくくることによって、「男性のユーモア」に対する拒絶感を示している<sup>76</sup>。

ユーモアは、このように私的な内容を述べることを可能にする。ジンにあっては、親しい友人に対してさえも普段は口にすることのないような経験や気持ちが書かれている。ジンの作り手たちはユーモラスな語り口で、感情を吐露し、それによって傷みを修復し、自己を解放する。そのユーモアにおいて、感情の吐露から「共生」の感覚が生まれる。ジンは手軽に作れるものであり、作り手と読者の距離が近いものであるからこそ、共生感を生み出す空間になりうるのだ。こうした「共生」とは、同じような経験を持つ仲間たちへと向けられた語りを通して確認された「共同体意識」も意味するが、画一的ではなく、お互いの差異を認め合いながら支え合うことを意味する。女性ジンにおける「抵抗としてのユーモア」は批判の声を上げるという点から「抵抗」を表しているが、彼女たちが日常生活において個人的に感じている抑圧を曝け出し、仲間を見つける抵抗の戦略でもあるのだ。

## おわりに

ユーモアは日常生活で繰り返される実践のひとつであり、ジェンダー規範と強く結びついている。女性は常に、ユーモアの受け手に位置づけられ、ひいては冗談的になることで、主体性の喪失を感じる。だが、ユーモアも同時に反逆な力を潜在している。本稿は、ユーモアを「強化」と「挑戦」という機能から論じて、ジンのユーモアを抵抗の実践として捉えている。

フェミニスト・ユーモアに関する議論においては、抵抗としてのユーモアの方についてしばしば論じられてきたが、それは限られた「パフォーマンス・ユーモア」を中心とするものであった。ジンの中にみられるユーモアは「表現的なユーモア」であり、「パフォーマンス・ユーモア」とは異なり、対象いかんにかかわらず、表現したいことを伝えることを重視する。そのため、ジンのユーモアはフェミニスト・ユーモアの議論で強調されてきたように、女性が自分自身の経験や感情を言説の主体として訴えることを可能にする。

さらに、歴史を遡ることによって、本稿はジンの中にある表現的なユーモアが、女性出版の歴史において連続性をもっていることを確認した。また、『女・エロス』と『呪詛』のテキスト分析を行うことで、女性ジンに表現された抵抗としてのユーモアの特徴と機能を明らかにしようとした。ジンの中に表現されたユーモアは、常に女性としての経験とジェンダー規範との矛盾を含んでいる。こうしたユーモラスな表現を「抵抗」、「共生」という2つの視点から検討し、ジンのユーモアは、共生感を生み出す土台となりうるのだと本稿は論じた。ユーモアを理解する過程で強化される共同体意識は、仲間同士の共生する空間を構築することに関与している。ジンのユーモアはジェンダー化されたユーモアの秩序に挑戦し、女性としての主体性、創造力を可視化する実践なのである。

謝辞 本研究は JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2145 の支援を受けたものです。

## 注

- 1 Ziv, Avner. *Personality and Sense of Humor* (New York: Springer, 1984); Salvatore Attardo, *Linguistic Theories of Humor* (Berlin: Mouton de Gruyter, 1994).
- 2 Lakoff, Robin. *Language and Women's Place* (New York: Harper & Row, 1975).
- 3 例えばレイコフの議論を批判する文章 “The Question of Tag Questions in Women's Speech: They Don't Really Use More of Them, Do They?”, *Language in Society*, no.4:3 (1975): 289-94. (Dubois B. L., and L. Crouch) が挙げられる。だが、レイコフの初版から2年後、その第Ⅱ部においては、女ことばを「劣ることば」とみられる傾向がなくなった。
- 4 McGhee, P. E. The Role of Laughter and Humor in Growing Up Female. In Kopp, C. B. (ed). *Becoming Female* (Boston, MA: Springer, 1979), 18. 訳は筆者による。McGhee は発達心理学の研究を出発点として、ユーモアの機能について議論されてきた研究者のひとりである。発達とは、心理学において、「個人が時間経過に伴ってその身体的・精神的機能を変えていく過程であり、成長と学習を要因として展開される」(広辞苑) ことである。
- 5 Weisstein, Naomi. “Why We Aren't Laughing Anymore,” *Ms. Magazine*. November 1973, 88-90.
- 6 Merrill, Lisa. “Feminist humor: rebellious and self-affirming,” *Women's Studies*, no.15(1988): 271-280; Barreca, Regina. (ed). *Last Laughs: Perspectives on Women and Comedy* (New York: Gordon and Breach, 1988).
- 7 Stephen Duncombe, *Notes from Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture* (3rd

- ed. Portland: Microcosm Pub)2007, 9.
- 8 筆者は拙文「日本におけるジン・カルチャーの起源と変容—女性のメディア創出から考えるジンの重要性」(『同志社グローバル・スタディーズ』vol.12 2021年、287-308頁。)において、日本のジンの起源について論じている。
  - 9 本稿において、「女性出版」とは女性による発行された出版物のことを指す。拙文「日本におけるジン・カルチャーの起源と変容—女性のメディア創出から考えるジンの重要性」の中に、筆者が「女性誌」と「女性が作った雑誌」の違いについて論じたように、女性は創作の主体として捉えるところが強調される。
  - 10 Hobbes, Thomas. “Sudden Glory Laughter,” Part I, chapter6, *Leviathan*, 1651.
  - 11 解放理論 (release theory) : ユーモアの生起を神経エネルギーの放出と認識している。不調和理論 (incongruity theory) : ユーモアは私たちの精神的パターンや期待に反することによって、何か不調和なものを知覚することから生起するという。(James Beattie, Immanuel Kant, Arthur Schopenhauer, Søren Kierkegaard などはこの理論の支持者)
  - 12 Gray, Frances. *Women and Laughter* (The Macmillan Press LTD,1994), 33. 訳は筆者による。
  - 13 Blumer, H. *Symbolic interactionism: Perspective and methods* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall, 1969); Goffman, Erving. *The Presentation of Self in Everyday Life* (London: Penguin, 1959).
  - 14 Ziv, 1984. (高下保幸訳『ユーモアの心理学』大修館書店 1995年) 51頁。
  - 15 Billig, Michael. *Laughter and Ridicule: Towards a Social Critique of Humour* (London: Sage, 2005); Davies, Christie. *Jokes and their Relation to Society* (Berlin: de Gruyter, 1998).
  - 16 Billig, 2005.
  - 17 Freud, Sigmund. *Jokes and Their Relation to the Unconscious*. (Trans and ed. James Strachey. New York: Norton, 1960). 105. 訳は筆者による。
  - 18 Crawford, Mary. “Gender and humor in social context,” *Journal of Pragmatics*, no.35:9 (2003): 1413-30; Hay, Jennifer. “Functions of humor in the conversations of men and women,” *Journal of Pragmatics*, 32(6). 2000: 709-42; Kaufman, Gloria, and Mary Kay Blakely, (eds). *Pulling Our Own Strings: Feminist Humor and Satire* (Bloomington: Indiana University Press, 1980).
  - 19 Coates, Jennifer. *Language and Gender: A Reader* (Oxford: Blackwell, 1998).
  - 20 Crawford, M., and D. Gressle, “Creativity, caring and context—Women’s and men’s accounts of humor preferences and practices,” *Psychology of Women Quarterly*, no.15:2 (1991): 217-31; Holmes, Janet. “Women language and identity,” *Journal of Sociolinguistics*, no.2:1 (1997): 195-223.
  - 21 Crawford, Mary. “Just kidding: Gender and conversational humor,” in *New Perspectives on Women and Comedy*, ed. Regina Barreca (Philadelphia: Gordon and Breach, 1992), 23-37
  - 22 Hay, Jennifer. “Functions of humor in the conversations of men and women,” *Journal of Pragmatics*, no.32:6 (2000): 709-742.
  - 23 Robinson, Dawn. T., and Lynn Smith-Lovin. “Getting a laugh: Gender, status, and humor in task discussions,” *Social Forces*, no.80 (2001): 123-158.
  - 24 Barreca, Regina. (ed.) *Last Laughs: Perspectives on Women and Comedy* (New York: Gordon and Breach, 1988); Gagnier, Reginia. “Slaying the angel and the patriarch: the grinning Woolf,” in Barreca (ed.), 1988.
  - 25 Lakoff, 1975.
  - 26 Beatts, Anne. “Can a woman get a laugh and a man too?” *Mademoiselle*, 140, 1975, 182-86; Weisstein, 1973. 女性が男性のユーモアに期待通りに反応することは認められるが、女性がユーモアを使用することは許されない。ピートは、男性は女性がユーモアを使うことを恐れている、と論じている。ピートによれば、それはユーモアが一種の効果的な武器とし

- て使えることを、男性はよく知っているからだという。(Beatts, 1973:186)
- 27 Ziv, 1984.
- 28 Kotthoff, 2006.
- 29 Ibid.
- 30 Lampert, Martin D. and Susan M. Ervin-Tripp, “Exploring paradigms: The study of gender and sense of humor near the end of the 20th century,” in *The Sense of Humor: Explorations of a Personality Characteristic*, ed. Willibald Ruch (Berlin, Boston: De Gruyter Mouton, 1998), 231-270.
- 31 Karly, Rowe Kathleen. *The Unruly Woman: Gender and the Genres of Laughter*. University of Texas Press, 1995.
- 32 Ibid.
- 33 Kaufman, Gloria, and Mary Kay Blakely, (eds). *Pulling Our Own Strings: Feminist Humor and Satire* (Bloomington: Indiana University Press, 1980).
- 34 White, Cindy. “Liberating laughter: an inquiry into the nature, content, and functions of feminist humor.” In Bate, B., and Taylor, A. (eds). *Women Communicating: Studies of Women’s Talk*. Ablex, Norwood, NJ, 1988.
- 35 Ibid.
- 36 Frey, Anna. “Introduction,” in *Who’s Laughing Now?: Feminist Perspectives on Humour and Laughter*, ed. Anna Frey (Demeter Press, 2021), 10. 訳文は筆者による。
- 37 Frey, Anna. “‘Man, That Guy’s Sad... but He Killed’: Survivors of Sexual Violence Joke about Rape,” in Frey (ed), 2021.
- 38 Marvin, Amy, “Feminist philosophy of humor,” *Philosophy Compass*, no.17:7 (2022) e12858. 訳文は筆者による。
- 39 Ibid.,7
- 40 Ibid.
- 41 Kaufman, “Introduction,” in Kaufman and Blakely (eds), 1980, 13-14.
- 42 言葉によるユーモアとは、ジョークやストーリーテリングを通じて表現されるユーモアを指す。言葉によるユーモアは、日常的な会話やスタンダップ・コメディの中にみられる。文字によるユーモアは書かれた文章の中に表現されるユーモアのことをさす。演出によるユーモアとは、顔やジェスチャーを用いて表現されるユーモアのことを指す。日常的な対話、スタンダップ・コメディや映画の中に使われる表現である。
- 43 McGhee, P.E. “The Role of Laughter and Humor In Growing Up Female,” in *Becoming Female*, eds. C. B. Kopp (Boston, MA: Springer, 1979).
- 44 Duncombe, Stephen. *Notes from Underground : Zines and the Politics of Alternative Culture* (3rd ed. Portland: Microcosm Pub, 2017), 158-61.
- 45 Ibid., 161.
- 46 Piepmeier, Alison. *GIRL ZINES: Making Media, Doing Feminism* (野中モモ訳『ガール・ジン：「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』太田出版 2011 年) 167 頁。
- 47 Ibid., 160-61 頁。
- 48 Ibid., 191-92 頁。
- 49 White, 1988, 87-88.
- 50 平塚らいてう・高群逸枝「資料発掘：女の宣言（1）」『女・エロス』創刊号（1973 年）133 - 141 頁。
- 51 大久保美知子「姉妹からの便り：青鞥を超えて」『女・エロス』第 2 号（1974 年）200 - 201 頁。
- 52 「女・エロス」編集委員会「宣言」『女・エロス』創刊号（1973 年）7-10 頁。
- 53 たとえば、谷野ひろみ「わたしの結婚」、中島通子「『妻の座』は何を守るか：婚姻制度内と外の女に関する判例をめぐって」、『女・エロス』創刊号（1973 年）があげられる。

- 54 竹豊「エッセイ：もうパワーストーンでよくな」『呪詛』 Vol.4 (2022年) 26-27頁。
- 55 母親にDESの投与は生まれた女兒に成長後の腫瘍、子宮形成不全等に相関すると報告されるにもかかわらず、(文章発表の時点まで)アメリカでは処方箋付きでの使用を認めていた。(カニー・アレン著、中島俊江訳「特集Ⅱ 女狙撃兵撩乱：医学・女性の医学」『女・エロス』第5号(1975年)140-143頁。)
- 56 『女・エロス』第5号(1976年)表紙；『呪詛』 Vol.4 (2022年)表紙。強調は原文による。
- 57 浜烈子「特集Ⅱ 女狙撃兵撩乱：習慣・トイレの話」『女・エロス』第5号(1975年)156-159頁。
- 58 はるのたけのこ「エッセイ：大衆浴場」『呪詛』 Vol.4 (2022年)7-9頁。
- 59 筆者の拙文「日本におけるジン・カルチャーの起源と変容—女性のメディア創出から考えるジンの重要性」による。(『同志社グローバル・スタディーズ』vol.12 2021年、287-308頁。)
- 60 『呪詛』は「Vol」の表記で発行番号を示すが、理解やすいため、本文に統一で「号」の表記とする。以下同様。
- 61 1912年5月から『読売新聞』に連載した「新しい女」の特集記事があった。『青鞥』の編集者たちを「新しい女」と揶揄し、風刺するものであったが、これに対して、平塚らいてうは「私は新しい女である」を題するエッセイを公表し、青鞥社もそれから、「新しい女」の呼称をあえて使うことに定まった。
- 62 上野千鶴子「フェミニズム」『不惑のフェミニズム』岩波書店2011年。
- 63 Ibid., 161-62頁。
- 64 プレンディング理論は認知言語学や哲学によって議論されてきた。しばしば創造的な言葉の使用と関連して議論される。
- 65 出典：Weblio 辞書 日本語表現辞典
- 66 出典：『女・エロス』第1号(1973年)「グラビア」。写真は筆者による。
- 67 Kaufman, 1980. 13-14.
- 68 出典：『女・エロス』第2号(1974年)飛鳥狂花「お気召すまに」。写真は筆者による。
- 69 出典：ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典
- 70 趙海涵「『白条鶏』から語る」『呪詛』第3号(2021年)。
- 71 中国では「鶏」という言葉は、女性に対する蔑称であり、「売春婦」を指す言葉として使われている。「白条鶏」という言葉は、無毛の色白い女性を指す性的暗示的な表現として使われている。
- 72 Walker, Nancy. “Humor and Gender Roles: The ‘Funny’ Feminism of the Post-World War II Suburbs,” *American Quarterly* no.37:1 (1985), 98-113.
- 73 White, 1988.
- 74 作者に声をかけられた3人は、「よさこい男」と「地味男」、「ヤンキー風な女」がいる。
- 75 作者と対照的に、「ヤンキー風な女」は同行した男性のユーモアに笑いながら、調子を合わせた様子だった。「よさこい男」の性的なユーモアを理解できた「ヤンキー風な女」はそのユーモアに無反応の「ピュアな作者」とは対照的であったが、同様にユーモアの受け手であった。
- 76 じょっちゃん「エッセイ：ピュアバーガーと私」『呪詛』第3号(2021年)。強調は筆者による。

## 参考文献

(英語文献)

- Attardo, Salvatore. 1994. *Linguistic Theories of Humor*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Barreca, Regina. (ed). 1988. *Last Laughs: Perspectives on Women and Comedy*. New York: Gordon and Breach.

- . 1992. *New Perspectives on Women and Comedy*. London: Routledge.
- Beatts, Anne. 1975. Can a woman get a laugh and a man too? *Mademoiselle*, 140. 182-86.
- Blumer, Herbert. 1969. *Symbolic interactionism: Perspective and methods*. Englewood Cliffs, N.J: Prentice-Hall.
- Billig, Michael. 2005. *Laughter and Ridicule: Towards a Social Critique of Humour*. London: Sage.
- Coates, Jennifer. 1998. *Language and Gender: A Reader*. Oxford: Blackwell.
- Crawford, Mary, and Diane Gressle. 1991. Creativity, caring and context—Women’s and men’s accounts of humor preferences and practices. *Psychology of Women Quarterly*, 15(2): 217-31.
- Crawford, Mary. 1992. “Just kidding: Gender and conversational humor”, In Barreca (ed.) *New Perspectives on Women and Comedy*. Philadelphia: Gordon and Breach.
- Crawford, Mary. 2003. Gender and humor in social context. *Journal of Pragmatics*, 35(9): 1413-30.
- Davies, Christie. 1998. *Jokes and their Relation to Society*. Berlin: de Gruyter.
- Dubois Betty L., and Lsabel Crouch. 1975. The Question of Tag Questions in Women’s Speech: They Don’t Really Use More of Them, Do They? *Language in Society*, 4(3): 289-94.
- Duncombe, Stephen. 2017. *Notes from Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture*. 3rd ed. Portland: Microcosm Pub.
- Freud, Sigmund. 1960. *Jokes and Their Relation to the Unconscious*. (Trans and ed. By James Strachey. New York: Norton.)
- Frey, Anna. (ed.) 2021. *Who’s Laughing Now?: Feminist Perspectives on Humour and Laughter*. Ontario: Demeter Press.
- Gagnier, Regina. 1988. “Slaying the angel and the patriarchy: the grinning Woolf.” In Barreca (ed.) *Last Laughs: Perspectives on Women and Comedy*. New York: Gordon and Breach.
- Gray, Frances. 1994. *Women and Laughter*. London: The Macmillan Press LTD.
- Hay, Jennifer. 2000. Functions of humor in the conversations of men and women. *Journal of Pragmatics*, 32(6): 709-42.
- Hobbes, Thomas. 1651. *Leviathan*. The Project Gutenberg eBook of Leviathan.  
[https://www.gutenberg.org/cache/epub/3207/pg3207-images.html#link2H\\_4\\_0047](https://www.gutenberg.org/cache/epub/3207/pg3207-images.html#link2H_4_0047) 最後アクセス : 2023 年 10 月 19 日。
- Holmes, Janet. 1991. Women language and identity. *Journal of Sociolinguistics*, 2(1): 195-223.
- Kaufman, Gloria, and Mary Kay Blakely, (eds.) 1980. *Pulling Our Own Strings: Feminist Humor and Satire*. Bloomington: Indiana University Press.
- Karly, Rowe Kathleen. 1995. *The Unruly Woman: Gender and the Genres of Laughter*. Austin: University of Texas Press.
- Lakoff, Robin. 1975. *Language and Women’s Place*. New York: Harper & Row.
- Lampert, Martin D., and Susan M. Ervin-Tripp, 1998. Exploring paradigms: The study of gender and sense of humor near the end of the 20th century. In Willibald Ruch (ed.) *The Sense of Humor: Explorations of a Personality Characteristic*. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. 231-270.
- Marvin, Amy. 2022. Feminist philosophy of humor, *Philosophy Compass*, 17(7): e12858. <https://doi.org/10.1111/phc3.12858>
- McGhee, Paul E. 1979. The Role of Laughter and Humor in Growing Up Female. In Kopp, C. B. (eds.) *Becoming Female. Women in Context: Development and Stresses*, vol 2. Boston, MA: Springer.
- Merrill, Lisa. 1988. Feminist humor: rebellious and self-affirming. *Women’s Studies*, 15: 271-280.
- Piepmeyer, Alison. 2009. *GIRL ZINES: Making Media, Doing Feminism*. New York: New York

University Press.

Robinson, Dawn. T., and Lynn Smith-Lovin. 2001. Getting a laugh: Gender, status, and humor in task discussions. *Social Forces*, 80: 123-158.

Spencer, Herbet. 1860. The physiology of laughter. *Macmillan's Magazine*. March, 395-402.

Walker, Nancy. 1985. Humor and Gender Roles: The "Funny" Feminism of the Post-World War II Suburbs. *American Quarterly*, 37(1): 98-113.

Weisstein, Naomi. 1973. Why We Aren't Laughing Anymore. *Ms. Magazine*. November, 88-90.

White, Cindy. 1988. Liberating laughter: an inquiry into the nature, content, and functions of feminist humor. In Bate, B., and Taylor, A. (eds.) *Women Communicating: Studies of Women's Talk*. Norwood, NJ: Ablex.

Ziv, Avner. 1984. *Personality and Sense of Humor*. New York: Springer.

(日本語文献)

アブナー・ジップ (高下保幸訳) 1995年『ユーモアの心理学』大修館書店。

アリソン・ピーブマイヤー (野中モモ訳) 2011年『ガール・ジン:「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』太田出版。

上野千鶴子 2011年『不惑のフェミニズム』岩波書店。

趙男 2022年「日本におけるジン・カルチャーの起源と変容—女性のメディア創出から考えるジンの重要性」『同志社グローバル・スタディーズ』第12号、287-308頁。

(ミニコミ・ジン)

(1973年)『女・エロス』第1号東京:社会評論社「女・エロス」編集委員会編

(1974年)『女・エロス』第1号東京:社会評論社「女・エロス」編集委員会編

(1974年)『女・エロス』第1号東京:社会評論社「女・エロス」編集委員会編

(1975年)『女・エロス』第1号東京:社会評論社「女・エロス」編集委員会編

(1975年)『女・エロス』第1号東京:社会評論社「女・エロス」編集委員会編

(2016年)『呪詛』vol.1 発行:ゆとり世代フェミニズム

(2019年)『呪詛』vol.2 発行:ゆとり世代フェミニズム

(2021年)『呪詛』vol.3 発行:ゆとり世代フェミニズム

(2022年)『呪詛』vol.4 発行:ゆとり世代フェミニズム

Abstract

## Humor as Resistance in Women's Zines: An analysis of "Ona · Erosu" and "Jyuso"

Nan ZHAO

The practice of humor is heavily influenced by gender normativity. Historically, women have not been recognized as the creators of humor, but rather as the audience of men's humor or as the butt of humor. Humor reflects the power relations between its creators and recipients, thus maintaining or even reinforcing social structures. Humorous expressions repetitively perform cultural texts, providing a breeding ground for stereotypes, especially those related to race and gender. Meanwhile, humor has a subversive potential to destabilize existing structures.

With the development of feminist perspectives on humor, women have finally gained visibility during humor practices. However, this visibility remains limited to women who can already make themselves heard, such as female comedians.

This paper aims to scrutinize the use of humor in women's zines as a strategy for expressing resistance. To evaluate zines from the perspective of feminist humor, I compare *Ona · Erosu*, published during the women's liberation movement, and *Jyuso*, a zine first published in 2016. Firstly, based on a review of previous research, I present the power relations constructed through humor and explore the function of humor in terms of "reinforcement" and "challenge". Secondly, I review the historical context of feminist humor and characterize this humor through zines as "expressive humor" rather than "performance humor". Finally, I trace the history of women's publishing practices. Through a textual analysis of *Ona · Erosu* and *Jyuso*, I examine these humorous expressions through the lenses of "resistance" and "symbiosis". In conclusion, I argue that the humor of zines can be a basis for creating a sense of solidarity.